人がいて話題がある

東愛知新聞編集局長
渡辺登喜雄

豊橋・だいほう商店街
理事長
山本岩次郎さん

日本ではじめてといわれる川の上の商店街が生まれたのは、昨年の暮れ。その名は「だいほうビル」である。

牟呂用水といわれる水上に五つの橋をはさんで五十数軒の商店が浮きでてきたのである。

にくまれ口を叩くならば、戦後市場のような暗さのなかに小さい店がひしめいていただいほうマーケットが、見ちがえるような、豊橋での代表的な商店街に「ころもがえ」をしたのだから、これはあまりにもワイド（大形）な変化であり、発展であった。

理事長の山本岩次郎さんは、報徳主義を多年実践してきた人格者である。

衣料の山本商店の一角で、ちょうど一服中の山本さんに

「昭和三十一年でしたかね、狭間プールのスタンドの完成式に顔を見せた今は亡き神野三郎翁が——山本さん、早く立派なビルを建てるんだな。あんたが建てようかと腹を決めれば、わしは、あんたのことだったら、どんな応援でもするぜ——と山本さんに話していたのを記憶していますよ」

というと、山本さんは

「あんた、それを聞いてたかね。ここの狭間プールというのは神野の御老人とは因縁のふかいプールでしてな。大正のころだったか、昭和に流れたか、旧市内に七つだけ小学校があったころ、神野さんが後援会長をやっていた狭間小学校でプールをつくるとき、神野さんは寄付金など集めていたらプールはできませんといって、御自分一人でつくってしまわれたんです。だから、そこに立派なスタンドができたんで神野さんの喜びはひとしおだったんです。そう、あのとき〝だいほうビル〟をつくれと、私を激励して下さっていましたな。いや、出来てみると、御老人に一目、見せたかったですよ」

と、山本さんは故人の姿と情熱がいかにもなつかしそう。さて、そこで前のだいほうマーケットの広さだが、前は七百坪だったのが、こんどは三千三百六十四へーべに拡大され、三階合わせての総建坪面積は六千九百八十九へーべと大飛躍。

標準店舗は間口が四・五㍍、奥行き七・九㍍。一階が店で二階が倉庫、台所、三階は洋室一間、和室二間という近代住居で屋上はもの干し場。もっとも商店によって二コマないし三コマを利用している。

山本さんは

「一昨年十二月に着工したんだが翌年の三月には用水の水がどんどん流れてくる。それまでに床工事はやらんならん。一方、水上の建物が許可になるか、どうかの心配はあるし、進むに進めず、あとへひくにひけず、ずいぶんと苦労をしたスタートでした」

と感慨。

見事な〝ころもがえ〟

「用水を通すために床下は水面より百三十㌢離す必要はあるし、普通の建築のように地ならしということはやれない。中央に柱は立てられないなど、建築は苦心の積みかさねでしたね」

「そういう御苦心のなかに完成したビルへ五十八軒の店舗が入居するについて、どういう決めかたをしたんですかね。私ら、局外者でもこれが大問題だったろうと思いますが」

「まったく、大問題でした。みなさん、思い思いの考えがありますからな。そこで全部のコマに対して等差を決めたんです」

「どういう方法で」

「まず、標準を五十とする。すると百の価値があるという場所があり百五十と評価される場所もでてきます。この等差を五十八人の全組合がつけたのです。それも一回だけでなく、五、六回にわたって回答をもとめ、最後の等差によって平均数字を出し、これをコマの等差数字にしたんですな」

「なるほど、お互いにつけた等差ならあとで文句はないわけですね」

「そこで、その等差によって等差金というのを払って、お互いが思い思いの場所に入居するというわけで」

「それでも、例えばAならAのコマに幾人かの希望者がある場合もありましょう」

「ありました。そのため、最後は抽せんにしました。これ以外に方法はなかったのです」

報徳主義実践の人格者

「いま一つ、だいほうの特色は問屋さんの多いことですね。これを新川橋から大手橋に集中させたいきさつは」

「これも、みなさん、苦労されました。究極には、現在のような見事な集中ができましたが、前日までは自由な抽せん方式でいこうといっていたんです。ところが当日になると、それはまずい、商店街の特色とともに問屋街の特色も持たなくては、将来に禍根をのこすじゃないか——という声が問屋さん側から出て、駅から遠い大手橋の方へ、進んで問屋さんがいくことになったんです。これは報徳の推譲の精神でした。涙ぐましいはかの推譲でした」

山本さんの誠実な老眼に涙っぽい光りがちらりとうごいた。

「立ちいって悪いですが、建設資金といったものは」

「前の七百坪の土地と建物との交換ですが、もちろん、それだけで新たに建つものではないからね。新建築は三億二、三千万円かかっていますから、一億が不足となり、それは借入金でまかないましたがね」

六十人ちかい組合員の先頭にたって、ここまで歩いてきた山本理事長のかげには山本晴康さんという近代感覚の専務がこの事業に挺身していたためではあるが、やはり、報徳精神という「だいほう」独特のスピリットが、五十八人を一丸とさせ、その行進を盛りあがらせてきたのであろう。

山本さんは

「いわば、ここはゼロの地帯ともいうべき地帯だったでしょう。そこへ建築をしたんだからね。また従来の四角にまとまった形が、軍隊でいう——タテに流れ——というように帯状の長いものに変わったんです。だから、組合員としても、いいかいなという不安はあったんです。ところが開店してみると、そういう不安は一掃されました」

話を聞きながら傍に立っていると、目立つことは自動車の客がふえたことだった。

「おい、牛肉百匁くれ」

運転台から店さきを呼んでいる。ここなら、こういう買物姿勢ができるのだ。

それと、北から店にはいり、南へ出ていけるという便利さもある。もっともこれについて山本さんは

「各店が両面に入口をもっている関係で、電気代その他で二軒ぶんの経費が要ることも考えられます。しかし、一面には日照時間は百軒、お互い健康の上でも生活環境はいうことなしになりました。従業員も近代化された店に誇りを感じているだろうと思います。目に見えないプラスは沢山あります。使う方も使われる方も団結して、だいほう商店街の新春を迎えたことは幸せです」

と語っていた。

私はそこで、組合事務所の屋上にある二宮尊徳神社に参拝させてもらった。

唐金つくりの屋根に白の桧。これが「だいほうスピリット」のシンボルかと、しばし、その前にたたずんでいた。これは「だいほうスピリット」の源泉でもあれば、また「だいほう」の守護神でもある。

一円融合。私は報徳の言葉を思い出した。この日はまさしく太陽のごとく、一円融合の文字が四ブロック九棟の五十八人の組合員の上に輝やいている正月だった。